

**Q：子どもたちが運動遊具で安全に遊ぶために気をつけること、安全管理の方法、子どもへの指導内容などを教えてください。（保育者より）**

A：運動遊具や固定遊具は、子どもたちの健康の増進や、体力づくり、情操を豊かにすることを目的として、つくられた施設で、子どもたちに、安全でかつ健全なあそびを提供してくれます。みなさんも、ご存じのように、よく見受けられる施設としては、ブランコやすべり台、うんてい、ジャングルジム等があります。

これらの遊具を安全に利用するためには、日頃からのメンテナンスが重要です。日常のメンテナンスの実施、定期点検をすること、さらには、製品の構造的な部分や、対処の難しい箇所については、専門家に依頼して、修理や改善をしておくことが求められます。

また、安全な遊具であっても、その使い方を誤ると、ケガや事故が起こります。遊具の安全な使い方を知ること、それらの基本を、使う子どもたちにも指導しておくことが求められます。

もちろん、子どもたちだけでなく、保育・教育現場の先生方や体育指導の先生方にも、つまり、子どもたちと関わるすべての大人やリーダーの人たちにも、ぜひとも知っておいていただきたいのが、運動遊具の安全管理の基本と安全指導の方法です。

まずは、運動遊具や固定遊具の設置に先立ち、導線や遊具の配置を周到に行い、子どもたちが出合い頭にぶつかったり、運動の流れが極度につまったりしないよう、安全、かつ、スムーズに、遊具を使った楽しいあそびが展開できるようにしておくことが大切です。

また、遊具の安全のためには、子どもたちの利用行動に必要とされる空間を確保すること（安全領域の確保）も、極めて重要なことです。子どもが遊具から落下したり、飛び出したりした場合に、到達すると想定される範囲です。この空間内には、遊具本体を除き、照明灯やマンホール、縁石などの施設や、石やガラス等の異物があってはなりません。

わくわくする遊具のもつリスク（予測できる危険）は、子どもたちの挑戦したい気持ちを掻き立ててくれ、その状況下で、様々なあそびや運動をすることによって、身体能力をより一層高めていきます。ただし、予測できない危険「ハザード」はなくす必要があります。

ハザードは、遊具の挑戦的要素とは関係のないところで発生する危険のことです。ハザードには、物的ハザードと人的ハザードの2種類があります。物的ハザードとは、遊具にできた不用意な隙間に、からだの部位が挟まってしまうといった、遊具の設計に問題がある危険です。人的ハザードとは、遊具使用時に、ふざけて押し合ったり、絡みやすい紐のついた手袋や靴を履いたりして、遊具の使用の方法に問題がある場合です。これらの危険は、子どもたちのあそびの中では、予測のできない危険であり、遊具の設計者や管理者、保護者などの大人が注意して未然に防ぐ必要があります。

遊具は、正しい使い方をして、仲良く遊びましょう。公園や園庭の遊具に不具合があるときは、安心して遊具を使えるよう、専門業者による点検のほか、職員による点検を実施してもらいたいものです。遊具を利用して、不具合や異変を感じた時は、管理者に連絡をすることが大切です。早期発見・早期対応が事故防止に繋がりますので、大人の協力が必要です。子どもも、ねじが緩んでいたり、異音を生じたりするようなときは、すみやかに近くにいる大人に伝えるよう、幼少児期から指導しておくことも重要でしょう、

また、立体遊具は、ネットで囲っておくことをおすすめします。さらに、ウレタン素材を多く使用

することで、転倒時のケガによる負担を軽減するように、計画しておくことも必要です。

そして、遊具を安全に利用するためには、日頃からのメンテナンスも重要です。日常のメンテナンスの実施、また、「定期点検」をすること、さらには、製品の構造的な部分や、対処の難しい箇所については、専門家に依頼して、修理や改善をしておくことが求められます。

自由あそびの場面のときにも、遊具の使用についての約束は、しっかり教えておく必要があります。しかし、次のようなささやかな約束事を、子どもたちに的確に伝えられる指導者が、はたして、どのくらいいるのでしょうか。

- ① 靴をしっかり履いて、脱げないようにする。
- ② マフラーのように、引っかかりやすいものは取って遊ぶ。
- ③ 上着の前を開けっ放しにしない。
- ④ ランドセルやカバンは置いて遊ぶ。
- ⑤ ひも付き手袋はしない。
- ⑥ 上から物を投げない。
- ⑦ 飛び降りない。
- ⑧ 遊具に、ひもを巻きつけない。
- ⑨ 濡れた遊具では、遊ばない。
- ⑩ 壊れた遊具では、遊ばない。大人の人に壊れていることを伝える。

(前橋 明)

子どもの健康福祉研究所